The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	障害者の結婚・妊娠・育児に影響を与える要因 : 当事者へのインタビュー調査による仮説生成の試み
Author(s)	竹田, 恵子
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90051
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

障害者の結婚・妊娠・育児に影響を与える要因
―当事者へのインタビュー調査による仮説生成の試み―

竹田恵子

１．問題と目的

日本における身体障害者は人口千人当たり 34 人、精神障害者は 31 人とされている。重複する障害を持つ者もいるため単純な計算はできないが、国民のおよそ 7.4%が何らかの障害をもつとされている[1]。

その一方で、結婚していない障害者の割合は、身体障害者が約 35%、精神障害者が約 64%と健常者の 26%と比較して高い[2]。晩婚化、非婚化が進んでいるとはいえ、障害者の家族形成は輪をかけて難しいかが垣間見える。障害者を対象としたアンケート調査では、いまだに結婚に反対されたり、子を持つことへ批判的な言葉を投げかけられたりした経験を持つ者が少なくないことが報告されている[3]。

障害ゆえの身体的、精神的な家族形成の困難に加え、障害者の家族形成に本来、無関係な差別や偏見、優生学的見地からの圧力なども関係していることは免れない。また、今日の障害者が置かれる雇用環境も家族形成を為し遂げる土台を危うくしていると考えられる。このように様々な要因が重なり合い、障害者の家族形成は難しくなっているが、それらの要因がどのように絡み合っているかは明らかにされていない。そこで本論文では、障害者の家族形成に関わる多くの要因を網羅的に視野に入れ、その関係性を仮説生成的に明らかにする。

２．方法

（１）概要

2020 年 10 月 1 日～2021 年 8 月 31 日に実施した障害者への個別のインタビュー調査から、障害者の家族形成に関する要因を仮説生成的に提示する。

（２）協力者

障害者 57 名（性別内訳は男性 27 名、女性 30 名／年齢内訳は 20 歳代 6 名、30 歳代 10 名、40 歳代 17 名、50 歳代 11 名、60 歳代 9 名、70 歳代 4 名／障害の発生時期は先天（うまれつき）24 名、中途（病気、事故等による）33 名／障害の種別は肢体不自由 26 名、視覚障害 25 名、重複障害[1)] 6 名）を研究対象とした。なお、研究対象者は、事前に研究の趣旨等を理解したうえで自発的に協力している。

（３）手法

全国の主要な障害者団体に協力を依頼し、団体からの紹介や団体の会報等を介して協力者を募集した。電話やビデオ通話にて、1 人の協力者から 60 分間程度かけて以下の①～③の項目を聞き取った。①結婚について：結婚を意識した恋愛の経緯、結婚までの経緯、配偶者を選んだ理由、婚活の経験、②妊娠・出産・育児について：子どもを持つことを考え始めた時期、周囲の反応、利用した各種支援、③障害者の家族形成に関して社会に伝えたいことや要望。なお、調査に先立ち、大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学系調査倫理委員会の研究倫理審査を通過させている。

（４）分析方法

質的分析の標準的手法に則り、①インタビューデータのなかの研究対象となる部位（家族形成にまつわる箇所）を抜き出し、②①を意味のある最小単位に切り分け、③すべての最小単位にコードを付け、④コード同士の類似性に着目しながらカテゴリーを作成し、障害者の家族形成に関する要因の関連をまとめた「概念図」を作図した。

３．結果

生成された 2005 個のコードをカテゴリーにまとめていったところ､｢結婚に必要なこと｣、「妊娠・出産に必要なこと」、「育児に必要なこと」、「社会に求められること」に分類できた（図１）。

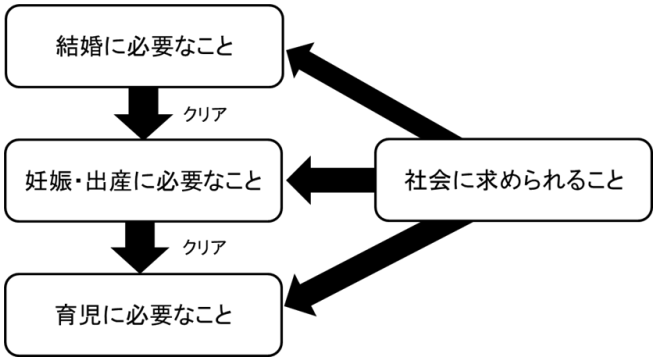

図１　障害者の家族形成に関するインタビュー概念図

（１）カテゴリー「結婚に必要なこと」

本カテゴリーには､｢経済的自立(例:*義理の両親に金銭的な部分は知ってもらわないと、結婚は難しい*｣、「家事能力（例：*私は家事の自信が無かったので、結婚は思っていませんでした*)」「心の自立（例：*心の状態が良いと一発直感が働いて（婚活）行動に移せるが、心が萎えてしまうと動けない*)」､「障害の受容（例：*彼は視力がなくなって間もなかったので、見えない状況を受け入れられないでいた*)」で構成される〈自立〉サブカテゴリー、「出

会いの場（例：*障害者が出会うきっかけ作りが、もっとあってもいいかなと思います*）」、「ノウハウ（例：*外国では幼少期から障害者が隣にいて慣れていく。でも、日本では男子校しか通っていなかった男の子が、大学に入っていきなり女子が隣に居て、気になるけど話し方がわからないっていうのと同じことが（障害者と健常者の間で）起きている*）」、「情報（例1：*車椅子で生活するために、病院で知り合った方に家の改造について聞いた*、例2：*性の悩みはとてもデリケートな問題だし、人によって違うので、同じ障害を持つ男性同士で（問題を）共有したり、克服方法を話し合ったりすることはありません*）」で構成される〈道具〉サブカテゴリー、および「遺伝に関する恐れの克服（例：*子どもが欲しいと思ったことはあった。あったけど、男の子ができると目の悪いのができると考えてしまう*）」、「虐待の連鎖への恐れの克服（例：*感情の浮き沈みや怒りっぽい自分の性質に気づいて、結婚できないのではないかと思い始めたのは思春期の頃。父が母に暴力をふるっていたので、「俺も親父と同じことするから結婚は無理だろう」と思った*）」、「結婚できないという思い込みの解消（例：「*選ばれた人しか結婚できない*」*ということを小さい頃から教え込まれる人がたくさんいると、はなから諦める人がたくさん出てくる*）」で構成される〈克服〉サブカテゴリー、そして「結婚したいという２人の意思（例：*この人だったら結婚したいなと思いました。彼女にその気持ちを伝えていますが、今のところ彼女は結婚するつもりはないという感じです*）」、「家庭環境の違いの克服（例：*彼女とは家庭環境が違い過ぎた、僕と姉の仲が良いと言って嫉妬するんです*）」、「跡取り問題（例：*私は長女で、女きょうだいばかりだった。だから、結婚にあたって、父が家名が途絶えるのは寂しいし、跡取りが欲しいと言い出した*）」で構成される〈パートナーシップ〉サブカテゴリーが含められた（図２）。

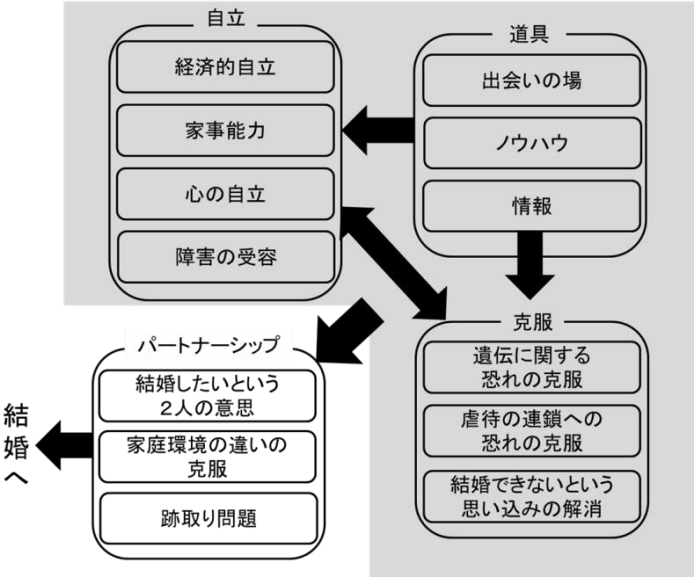

図２　カテゴリー「結婚に必要なこと」の概念図

（２）カテゴリー「妊娠・出産に必要なこと」

本カテゴリーには「子を持ちたいという気持ち（例：*婚活しようと思ったのは、子どもが欲しいと思ったから*）」、「親になる自覚（例：*今の医学の力だったら障害者でも子どもをつくることは全然できます。でも、覚悟を持ってやる必要があると思います*）」「子を持てるという自信（例：*子どもは欲しいと思っていましたが、育てる自信がなかった*）」で構成される〈意志〉サブカテゴリー、「遺伝に関する恐れの克服」、「虐待の連鎖への恐れの克服」、「医学的リスクの克服（例：*車椅子の人の出産に詳しい専門の医師に相談して、リスクを知ったうえで私は出産ができたと思います*）」で構成される〈克服〉サブカテゴリー、そして「情報（例：*子どもができてから病院の助産師さんにお願いして、車椅子の女性が出産した実例を扱う論文とかを全部集めてもらいました*）」、「支援（例：*彼のお母さんから「子どもができたら協力するから」と言われていました*）」、「妊娠・出産可能な身体（例：*結婚したときは、すでに高齢出産になることもわかっていたので、子どもを持たなくてもいいと思っていました*）」、「対応可能な医療機関（例：*片麻痺があると出産の手術のときに麻酔の効き方が予測しづらく、すごく危ない。命に関わるので、大きな病院でなければ手術を扱ってくれません*）」、「対応可能な医療者（例：*訪問看護をお願いしている医院の先生に「お腹に子どもがいるのに排泄介助するのが怖いと言う看護師がいるので、これで主治医を辞めさせていただきます、あとはご家族でやってください」といきなり言われました*）」で構成される〈道具〉サブカテゴリー、最後に、「出産後の生活の見通し（例：*私は結婚して子育てしてなんてピンときていなかったので、妊娠して、「子どもが私みたいに目が悪かったらどうしよう」と不安になりました。でも、夫は私と結婚したかったので、子どもができて大喜びでした。夫は「目が見えなくてもいいよ、俺も頑張って子育てに協力するから」くらいの勢いでした*）」で構成される〈パートナーシップ〉サブカテゴリーが含められた（図３）。

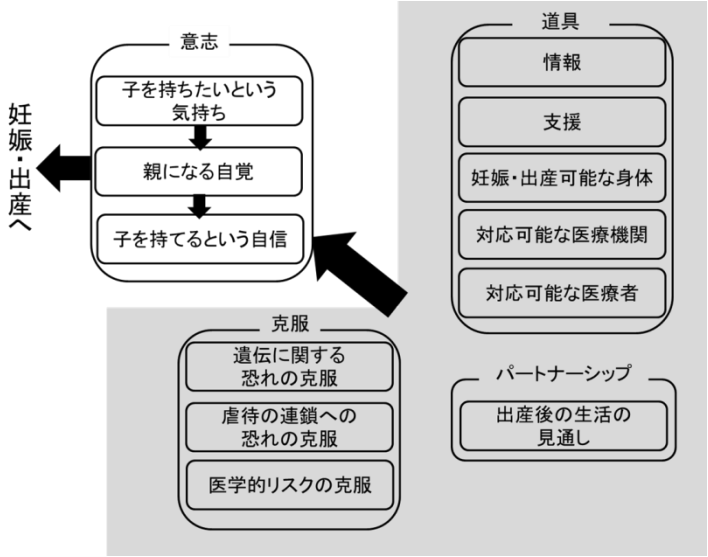

図３　カテゴリー「妊娠・出産に必要なこと」の概念図

（３）カテゴリー「育児に必要なこと」

本カテゴリーには「子育てできるという自信（例：*私は身体的に子どもは産めるかもしれないが、子どもを持つのは無理だと思っていた。でも、次第にできることが増えていって、少しずつ「何とかなるだろう」と思えるようになった*）」、「創意工夫（例：*娘はミルクで育てたのですが、見えない私は、どうやってお湯の量を測ったらいいかわからない。だから、小さなカップをたくさん集めてきて、それにお湯を入れて、火傷をしそうになりながらミルクを作りました。そのうちに、ポットから注がれるお湯の音で、だいたいどのくらい入っているか、わかるようになってきました*）」で構成される〈意志〉サブカテゴリー、「遺伝に関する恐れの克服」、「虐待の連鎖への恐れの克服」で構成される〈克服〉サブカテゴリー、「育児に適した住居（例：*子どもは床をハイハイします。だけど、車椅子は外からそのまま土足みたいな状況で家に入るので、これをどうしようかと思いました*）」、「支援（例：*おっぱいをあげることはできますが、オムツ替えとかはできません。だから、ヘルパーさんにミルクをつくってもらったり、オムツ替え、着替え、お風呂は私の母親と妹に手伝ってもらっています*）」、「支援を受けるノウハウ（例：*同じヘルパーさんに来てもらいたいところですが、辞めたり入ったりっていうのがあります。だから、そこは柔軟にいけたらなと思っています*）」、「情報（例：*おむつを換えたこともないので母親学級に行ったり、保健師さんの話を聞きに行ったり、朗読ボランティアさんに育児雑誌を読んでもらうのに点字図書館に行ったりしていました*）」「で構成される〈道具〉サブカテゴリー、「仕事と育児の両立（例：*両親が近いところに住んでいるから、子どもができたら良いという思いもあった。でも、夫は無理をしてまで子どもはいらないと言っていたので、育児と仕事を両立できるか不安が大きかった*）」、「配偶者との協力体制（例：*夫は「君が一人で買い物に行くなんて心配だから、俺が帰ってきてから一緒に買い物に行こう」と言って大事にしてくれました*）」で構成される〈パートナーシップ〉サブカテゴリー、「子育てコミュニティへの参加（例：*私は他のお母さんと同じようにしたい気持ちが強かったので、幼稚園の共同作業は何でも出ました。もちろん、できないところはお願いしました*）」、「子どもへの差別やいじめ対策（例：*娘が成長して授業参観とかで、偏見が出てくるんじゃないかと思う*）」、「子どもの遺伝に関する対応策（例：*産科では、「見えなくても子どもを育てられますか」「緑内障も遺伝がゼロではないので覚悟もできていますか」と聞かれました。本当に運命なので、「そういう覚悟です」と話しました*）」で構成される〈育児環境の整備〉サブカテゴリーが含められた（図４）。

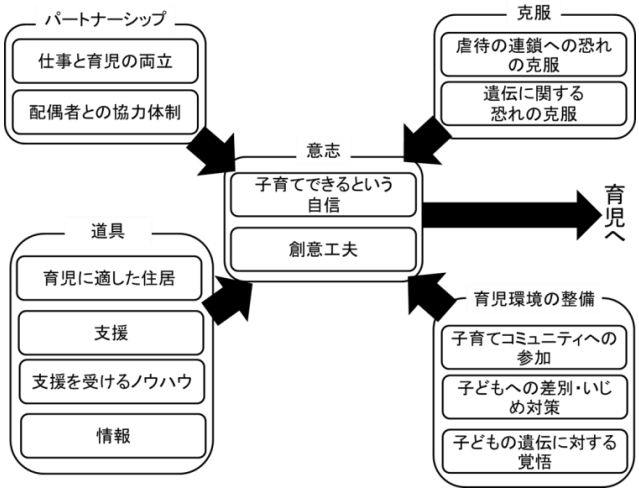

図４　カテゴリー「育児に必要なこと」の概念図

（４）カテゴリー「社会に求められること」

本カテゴリーには「物理的バリアフリー（例：*バリアフリーの病院を探すところから始めなければならなかった*、「心理的バリアフリー（例：*好奇の目で見られないように「心のバリアフリー」がもっと広まって欲しい*)」、「家族形成支援（例：*障害者が自分の子どもを育児するときの支援制度が整っていない*)」で構成される〈支援の拡充〉サブカテゴリー、「障害者に関する教育（例：*小さい頃から、「障害がある人もない人も同じ人間なんだよ」という教育が、今までは足りなかった*)」、「障害者に対する教育（例：*特別支援学校に行っていたら、子どもたちが将来、自分がなりたいビジョンを描けない*)」で構成される〈教育〉サブカテゴリー、および「多様なパートナーシップ（例：*出産にこだわらないパートナー関係や性に対する多様性をもっと広めたい*)」が含められた（図５）。

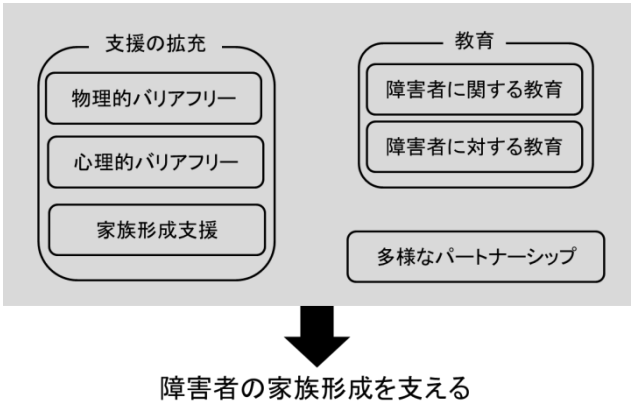

図５　カテゴリー「社会に必要なこと」の概念図

４．考察

分析の結果から仮説を生成した。

仮説：障害者の家族形成では〈自立〉が最初に直面する課題であり、これをなしとげるためには〈道具〉を用い、〈パートナーシップ〉を育みながら課題を〈克服〉する必要がある。〈自立〉を果たした障害者は家族形成への〈意志〉を確立し、目的を果たすために〈道具〉や〈パートナーシップ〉をさらに充実させ、〈育児環境の整備〉も積極的に進めていくと考えられる。そして、障害者の家族形成を支えるためには、社会が〈支援の拡充〉と障害にまつわる〈教育〉を発展させ、〈多様なパートナーシップ〉を受け容れることも必要である。

本研究では障害者の家族形成に関わる要因を洗い出し、仮説を提出することができた。この仮説では、〈自立〉が障害者の家族形成において最大かつ最初に立ち上がる課題であり、これをいかに超克するかが妊娠、出産、育児へと繋がる鍵となるが、社会のあり方も障害者の家族形成に重要な鍵を握っていると考える。この仮説を検証し、障害と家族形成の関係およびその背景で影響を与える医学的観点を解明するため、今後は計量的な調査に進むことを予定している。

謝辞

インタビュー調査に協力してくださった 57 名の皆様に感謝いたします。

脚注

１）精神障害との重複が 5 名含まれる。

引用文献

[1] 内閣府、2018、「平成 30 年版障害者白書」、内閣府.
[2] 内閣府、2013、「平成 25 年版障害者白書」、内閣府.
[3] DPI 女性障害者ネットワーク、2012、「障害のある女性の生活の困難―複合差別実態調査報告書」、DPI 女性障害者ネットワーク.

補足

本論文は JSPS 科研費 JP18K12928 (課題名：障害者の子を持つ困難に影響を与えるローカルノレッジとしての医学的観点の解明)の助成を受けて執筆されたものであり、子育て学会第 13 回大会（2021 年 11 月オンライン開催）にて発表されたものに一部加筆している。